

目次

1) 基本理念

2) 3つの基本的な方向性と
経営的な視点

3) リニューアル計画の概要一覧表
及び、【7】つの取り組み

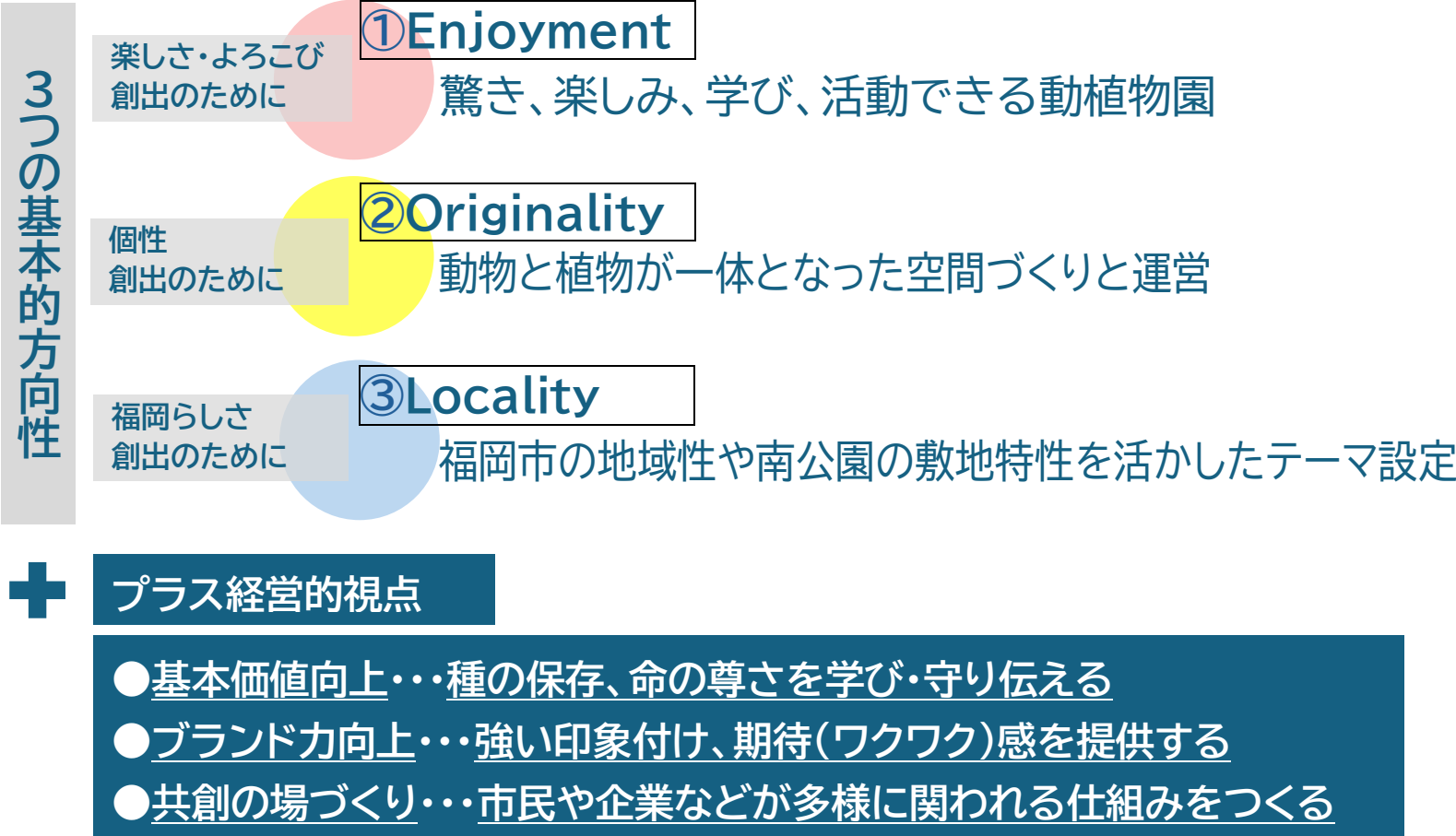
- 【1】 動植物園の魅力を高める一体的な運営
- 【2】 動物本来の生態を支える環境づくり
- 【3】 期待感や心地よさに配慮した観覧環境づくり
- 【4】 都市で育まれる命を学び楽しめる植物園
- 【5】 四季を通じて魅力溢れるガーデンづくり
- 【6】 試しながら学べる市民の実践の場づくり
- 【7】 来園者満足度の充実

■ ゾーニング図

1) 基本理念

「21世紀・人と動植物の共存、多様な関係性の共創」

2) 3つの基本的な方向性と経営的な視点



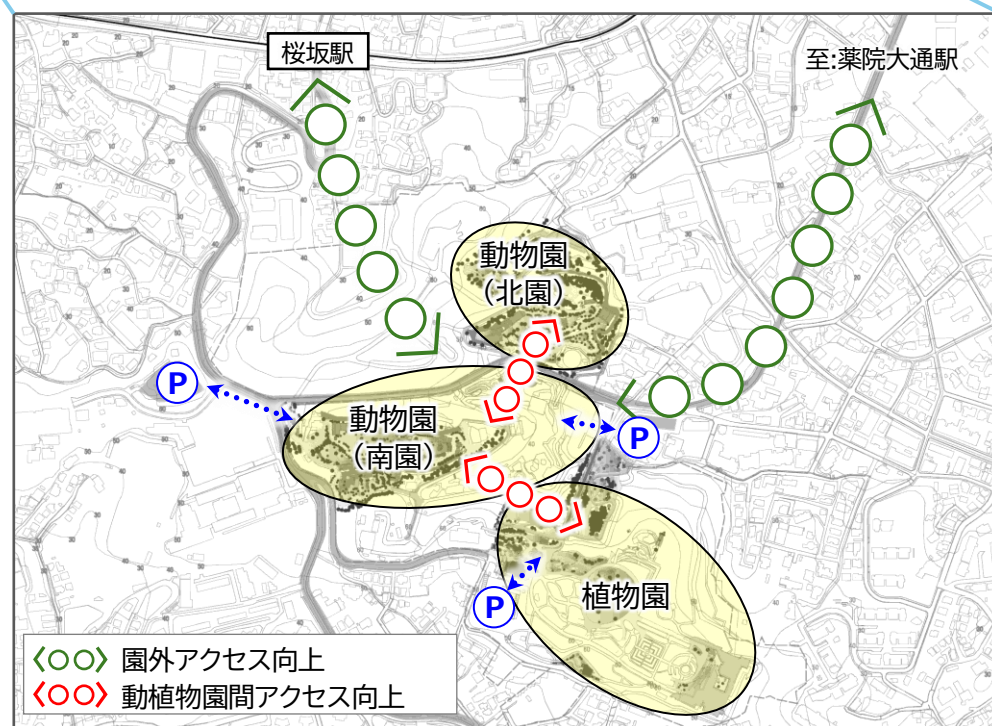
3) リニューアル計画の概要一覧表

✓目標年間入園者数	100 万人以上とし、一般入園者に加え、ボランティアメンバーやボタニカルライフスクエアの夜間利用者など、様々な形での来園者の増加を目指す
✓動物園エリアの事業計画	○第 1 期整備⇒平成 18 年度～令和4年度 「アジア熱帯の渓谷エリア」などのエントランスに近い区域を整備 ○第 2 期整備⇒「アフリカの森と草原エリア」「ユーラシアの森エリア」「日本の自然エリア」等を整備
✓植物園エリアの事業計画	○一人一花運動の拠点である植物園の機能強化として、令和6年度～令和7年度⇒「温室前広場」「エントランスガーデン」等を整備 ○「植物園入口広場、緑の情報館」「いきもの水辺エリア」「温室エリア」「眺望エリア」等の施設整備
✓両園共通	○「動物」と「植物」の個々の生命と、それら全てと「人」の営みを含め、持続可能な生態系を“見える化”した新たな動植物園デザインを実現する ○無料区域についても、動物園正門から植物園正門までのエリア、植物園外周園路等もあわせてあり方などを検討していく ○ライフサイクルコストの低減と維持管理性向上の観点を踏まえ、魅力的な動植物園に向けた再整備を目指す

★「立地場所」や「動物園と植物園の併設」という福岡市動植物園の強みを活かした運営

●市中心部から近い立地

■市中心部から近く、丘陵地の自然と地形を活かした空間性を兼ね備えており、坂道などを活用した多様な体験を提供できる場所に立地しています



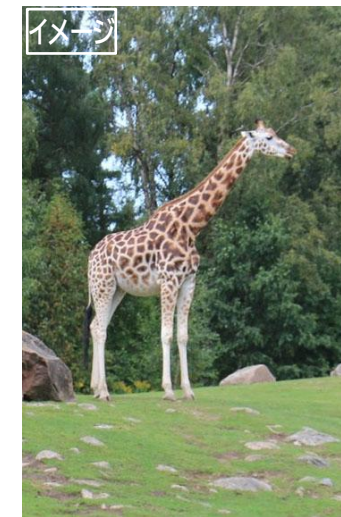
▲動植物園と周辺エリアの関係図

●動物園と植物園が一体となった空間づくり

■動物園と植物園が同じエリア内にあるポテンシャルを活かし、多種多様な関係性が共創する、花や緑があふれる動植物空間を創出します



▲展示動物の食物網が植物園内で観察できるなど、動植物の連携展示を推進します



◀▲動物園内にも花やみどりが溢れた景観づくりを行うことで、魅力向上を図るとともに、暑熱対策としての役割も期待できます

●効果的な運営

✓来園者の期待感・満足度を高め、来園者の増加や収入・寄付等の増加を図るため、新たな魅力づくりや発信などのソフト施策の展開を意識した施設整備や、市民や企業などの活動の輪の広がりにつながる環境整備を実施します

✓両園がより一体となった運営体制や、サポーター制度の拡充等による多くの市民が関わりやすい仕組みづくり、夜間の積極活用などメリハリが利いた営業時間の設定等、より効率的・効果的な運営を実施します



▲「夜の動植物園」の開催

✓再生事業を円滑に進めるため、ライフサイクルコストの低減という視点を持つことが重要であることから、イニシャルコストとランニングコストのバランスを適切に見極めながら、計画的に事業を推進していきます

① 動植物園の魅力を高める一体的な運営

★動物福祉に配慮しながら、動物の関係性を考慮して行う展示空間づくり

●動物展示の考え方

- ◆ 現行の動物の終生飼育を基本とし、限られたスペースの中でも動物福祉規程を十分に考慮し、生息環境に近く広さのある獣舎を確保するとともに、今後の導入可能性を踏まえながら、適正な動物種を見極めていきます(70～100 種程度)
- ◆ 動物の生息環境を再現し、本来の行動や習性を発揮させる生息環境展示など、動物福祉規程に適合した、魅力的な展示を実施します
- ◆ 緑陰のある誰でも見やすい観覧スペースや、高低差を利用したビューポイント等を整備します

●動物福祉に配慮した展示を行い、来園者が楽しみ学べる環境を作ります

■動物福祉の向上

・動物福祉規程を踏まえた飼育環境を整備するとともに、動物が健康でより良く暮らせるよう環境エンリッチメントに積極的に取り組みます

■生息環境展示

・野生に近い環境の中で、本来の行動や習性を発揮させることが可能な“生息環境展示”の手法を基本とします

■メッセージ

・動物の生態や社会性に関する“メッセージ”を投げかけ、来園者が楽しみながら人と動物の多様な関係性へ気付くきっかけをつくります

●動物の関係性を踏まえて構成し、調査研究の場としても機能します

■動物間関係性

・同じ動物種だけでなく、異なる動物種同士におけるコミュニケーションや緊張感等の種間相互作用も考慮して放飼場の位置を設定するとともに、異なる動物のローテーション展示にも将来的に一部対応可能となるような空間配置の構成計画を行います

■園全体を研究フィールドへ

・動物飼育のためだけの施設と位置付けるのではなく、施設環境の全てが調査・研究の場となるよう取り組みます



▲福岡市動植物園で飼育している動物たち

●園の使命や条件等を踏まえて飼育動物種を検討・設定します

■飼育動物種

・5つの視点から、動物種を検討・設定します

- 1) 現行動物の終生飼育を基本とする
- 2) 生息地別展示テーマの代表種
- 3) 市民に親しまれ、環境教育として展示効果が高い種
- 4) 保全に積極的に取り組む在来種、希少種、絶滅危惧種
- 5) 九州・福岡に生息する、又は過去生息していた動物種

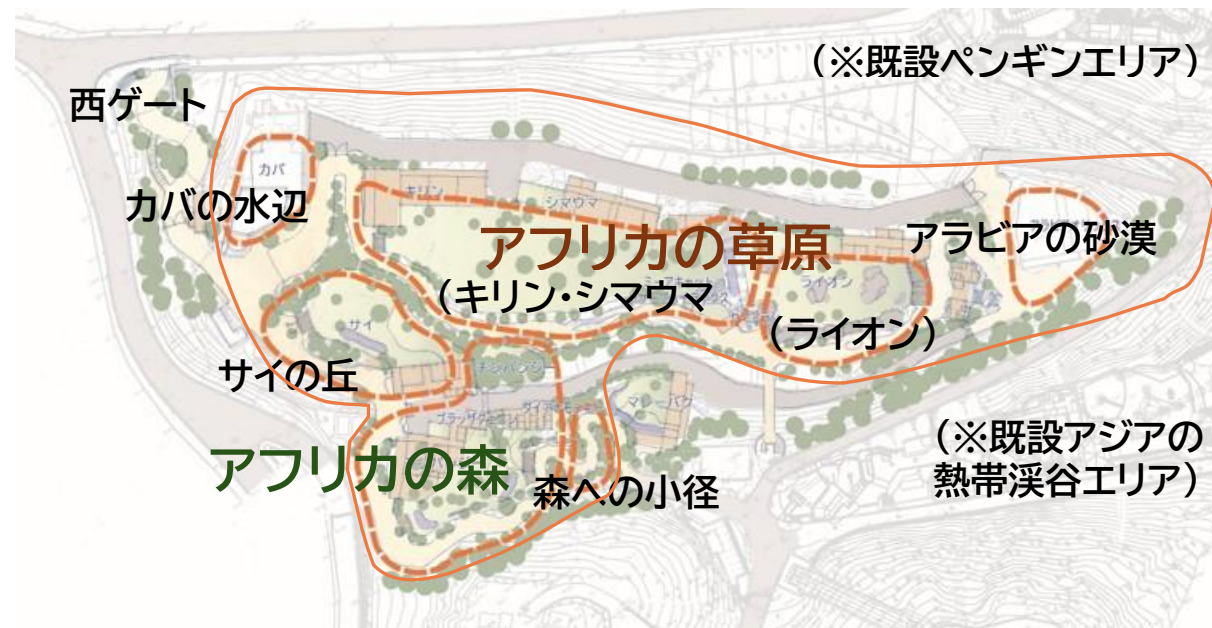
②

動物本来の生態を支える環境づくり

1/2

●動物相互の関係性を意識したエリア設定を行います

■「アフリカの森と草原エリア」計画平面(案)



「アフリカの森と草原エリア」

■展示空間デザインコンセプト

・アフリカの“森林”に暮らす霊長類・類人猿の樹上生活、樹冠、林内、地上・水辺のすみ分けを知り、“草原”に暮らす草食動物と肉食動物(捕食者)を通景で眺め、野生下での動物の関係性の理解を図る

■展示メッセージ

・アフリカの森
“森”に住む動物同士のコミュニケーションを「聴いて」ほしい
・アフリカの草原
「におい」が持つ可能性と“草原”での役割を知ってほしい



▲サバンナに暮らすキリン等とその捕食者であるライオンとの関係性の理解を図ります

■「ユーラシアの森エリア」計画平面(案)



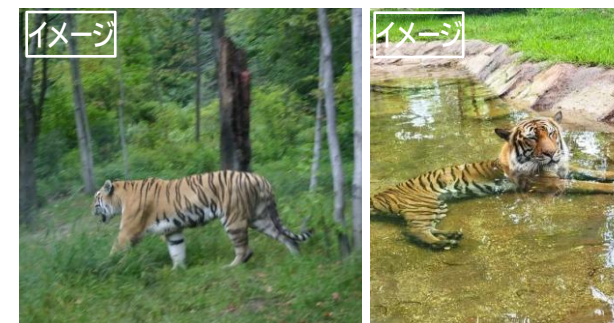
「ユーラシアの森エリア」

■展示空間デザインコンセプト

・ユーラシア北東部の針葉樹林帯の生態系の頂点に暮らす種や、高地の温帯林に暮らす種等、寒冷地に適応した動物の暮らしを知る

■展示メッセージ

・寒さ厳しい環境で生きる動物のたくましさや躍動感を「感じて」ほしい



▲針葉樹林の生態系の頂点に暮らすアムールトラのイメージ。ネコ科ではあるものの水辺を好む一面を持っています

●動物自らが行動や場所を選択できる環境(岩場・水辺・樹冠・木陰等)を導入します



▲樹上性のレッサーパンダ



▲森に暮らすチンパンジー



▲群れで生きるニホンザル



▲倒木上で休むブラッザグエノン

■福岡市動植物園再生基本構想・計画 (改訂版概要)

② 動物本来の生態を支える環境づくり

2/2

／ R8年(2026)3月

③ 期待感や心地よさに配慮した観覧環境づくり

★屋外での体験や心地よさ等を、生きものも人も享受できる観覧環境づくり

●期待感を高めつつ心地よさもある観覧経路を設定し、印象深い遭遇体験が得られるビューポイントを配置します

■展示メッセージやコンセプトの設定により、メッセージ性の高い観覧環境を創出すると共に、展示空間構成にもとづく観覧動線を組み立てます



▲緑陰効果の高いみどりなどによる見え隠れにより、高揚感が得られる快適な観覧動線のイメージ

▲既存木や常落混交植栽を活かしながら、周遊路の上部を樹冠で柔らかく覆い、木陰や木漏れ日の心地よさを生み出します



▲観覧動線の一部(北園エリア)

●獣道を分け入る様な環境体験や、ビューポイントを主体に没入感と動物への尊厳が高まる演出を行います

■生息環境展示により、来園者がその生態系全体を体感できるようになります

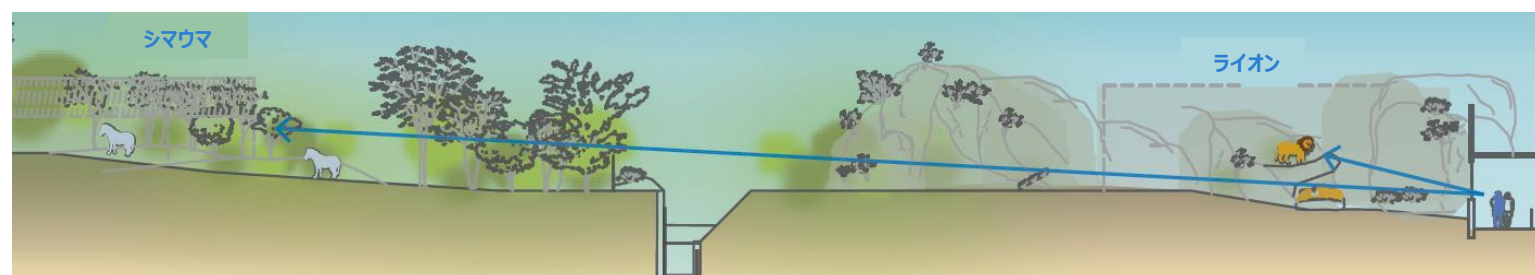
■地形の起伏や高低差、植栽を活かしながら見え隠れを演出しつつ、複数の動物が重なって見える「通景」を生み出します



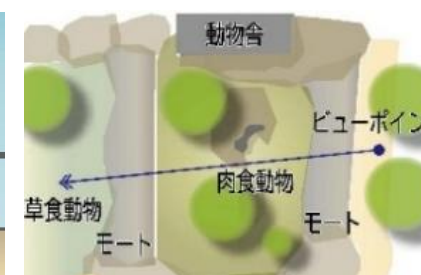
▲生態系関係性の理解を高める草食動物と肉食動物の通景展示



▲岩山やテラスなどによる高低差を活かして、動物と遭遇するシーンのイメージ



▲通景展示のイメージ



▲草木や岩、土等で生息地に近い環境をつくります

■福岡市動植物園再生基本構想・計画（改訂版概要）

／ R8年(2026)3月

★都市とそこに育む生命を感じ、学びへと誘う、これまでの植物園を超える植物園

●植物種展示の考え方

- ◆ 温室を含め、現行の植物を可能な限り維持・保全しつつ、リニューアルに応じてエリア毎のテーマ性や生育環境にあった種の充実を図ります
(現況展示種数 屋外展示植物:約 1,500 種 温室展示植物:約 660 種)
- ◆ 従来の陳列型の展示に加え、園全体に花やみどりが溢れた、風景としての見ごたえがある景観づくりを進めます
- ◆ 四季を通じて見どころがあるガーデンや楽しみながら学ぶことができる展示など、誰もが訪れたい魅力づくりに向けて取り組みます

●展示・体験イベントの充実

- 多様な主体が様々な目的で利用できる空間づくりや、展示や体験イベントの充実を図ります



▲植物といきものの関係をわかりやすく展示



▲日中から夜間まで、既に数多くの市民による協働開催イベント等が行われている「ボタニカルライフスクエア」



▲市民と植物をつなぐファシリテーションが大切

●都市緑化植物園としての基本的な役割

- 植物の展示をとおした、緑化の啓蒙、普及啓発、レクリエーション機能を備え、市民の憩いの場として、楽しみながら緑を育てることを学ぶ

●身近な植物相談環境を整備

- 市民が身近に植物を相談できる環境づくりとして、植物園エントランスと一体となった園内外から利用できる「緑の情報館」などをリニューアルします



▲現在の植物園エントランス



▲現在の「緑の情報館」

●植物種選定にあたっては、現行の植物を保全しつつ、学びへつながる植物を充実

■育成植物種

- ・5つの視点から、植物種を検討・設定します

- 1) 現行の植物の維持を基本とする
- 2) 市民に親しまれつつ、まちなか緑化をリードする種
- 3) 九州・福岡に生育する在来種、保全種など、生物多様性に寄与する種
- 4) 歴史・文化・生活との関わりが深く、多面的な価値に触れられる種
- 5) エリアテーマに沿った種

④

都市で育まれる生命を学び楽しむ植物園

★植物の365日／春夏秋冬を感じるガーデンづくりへの挑戦

●新旧ガーデンの競演により園全体に花やみどりが溢れる、風景として見ごたえのある景観づくりを行います

■植物園の新たな顔としてオープンした「エントランスガーデン」は、四季を通じて約100種、10,000株の草花が咲き誇っています



▲サーキュラーテラス、庭園内のファニチャー、カゼボ、デザイナーによるシンボルガーデン等



▲温室でしか見られない貴重な植物等を、天候に左右されずいつでも楽しめる場づくり



▲エントランスガーデンを中心に四季折々に色づく植栽や生物が身近に感じられる植物を展示



▲温室内に休憩施設等の導入を検討



▲ロックガーデン等の適正な草花管理



▲季節が感じられる花木管理



◀展望台カフェ前、眼下の紅葉樹園を含むビューポイントの拡大整備、既存樹林は野鳥のサンクチュアリとしての保全

●多様で繊細な花木の組合せにより、花景色や生物多様性の形成に貢献します

■動植物園内に限らない無料区域においても、春夏秋冬を彩る花景色づくりを検討します



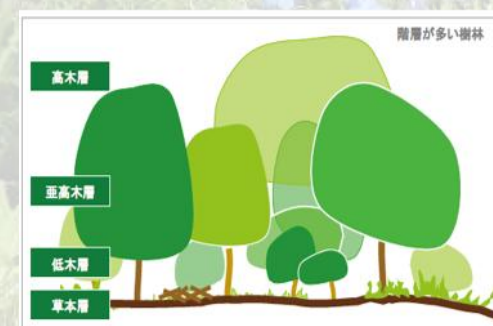
▲無料区域内の階段

季節ごとの花色・開花期・紅葉を楽しめる植栽として、ジンチョウゲ、ツツジ、レンギョウ、ユキヤナギなど、多様な花木を組み合わせることにより、視覚的にも楽しめるような仕掛けを検討します



▲季節の移ろいを感じられる桜などの花木の植栽

▼グラバルガーデンのイメージ
都市デザインのトレンドを意識したガーデンづくり



▲「郷土種による極相林」と「まちなか里山」の森づくり
里山再生はボランティア活動の基盤、環境教育の場と設定します

⑤ 四季を通じて魅力溢れるガーデンづくり

★活動拠点となるバックヤードガーデンエリア(仮)を使いこなし、多様な人々のウェルビーイングを実現

●ターゲットは「一人一花運動」が目指す、未来のまちづくりへの取り組みに共感される市民や企業などの方々

■現在のモデル庭園エリアを「ボランティア活動拠点施設」にリニューアルすることで、ボランティアの学習の場、企業とのコラボレーションを含む実践の場として活用できる空間の創出を目指します



▲ウメ、ボタン、シャクヤク、ツバキ、アジサイなどの見本園や郷土樹木園の九州在来種などを教材として、フィールド全体で学べるようなイメージ

●花によるまちづくりの豊かさへの市民の気づきを高め、更なる学びのための拠点機能の強化を図ります

■ボランティアや企業などの動植物や自然環境全般に対する関心・興味を引き出し、活動の輪を広げていきます



▲バックヤードでの市民活動やガーデニングツールが並ぶ何気ない日常のディスプレイなど、来園者を新たな参加者へと変えるような、ワクワクさせるような情景を創出します

▲地道な活動を支える「拠点小屋」のイメージ

⑥

試しながら学べる市民の実践の場づくり

★誰もが一緒に楽しめる動植物園を目指したユニバーサルデザインの推進

●回遊性の向上に取り組んでいきます

まちと
つながる

●徒歩利用の促進

・薬院大通駅(動物園前)や桜坂駅からつながる経路は、歩いて楽しい仕掛けづくりや、地域連携などにて徒歩利用を促進します

●公共交通機関の利用促進

・地下鉄やバスなどの公共交通の利用促進PR等を推進します

なかを
つなげる

●園路の勾配緩和と駐車場の拡充

・起伏の多い地形上、園内急勾配(※8%勾配以上)だった割合を、6割⇒1〜2割程度まで下げる改善計画を進めます
・駐車場は事業進捗に応じて適宜、台数を拡充します(現況 449 台)

●スロープカーとエレベーターの適材適所の配置

・スロープカー2機は導入済
・勾配緩和が難しい部分は、エレベーターを適宜配置します(※園内1カ所、アジア熱帯の渓谷エリアには2カ所整備済)

●回遊をサポートする園内モビリティを導入

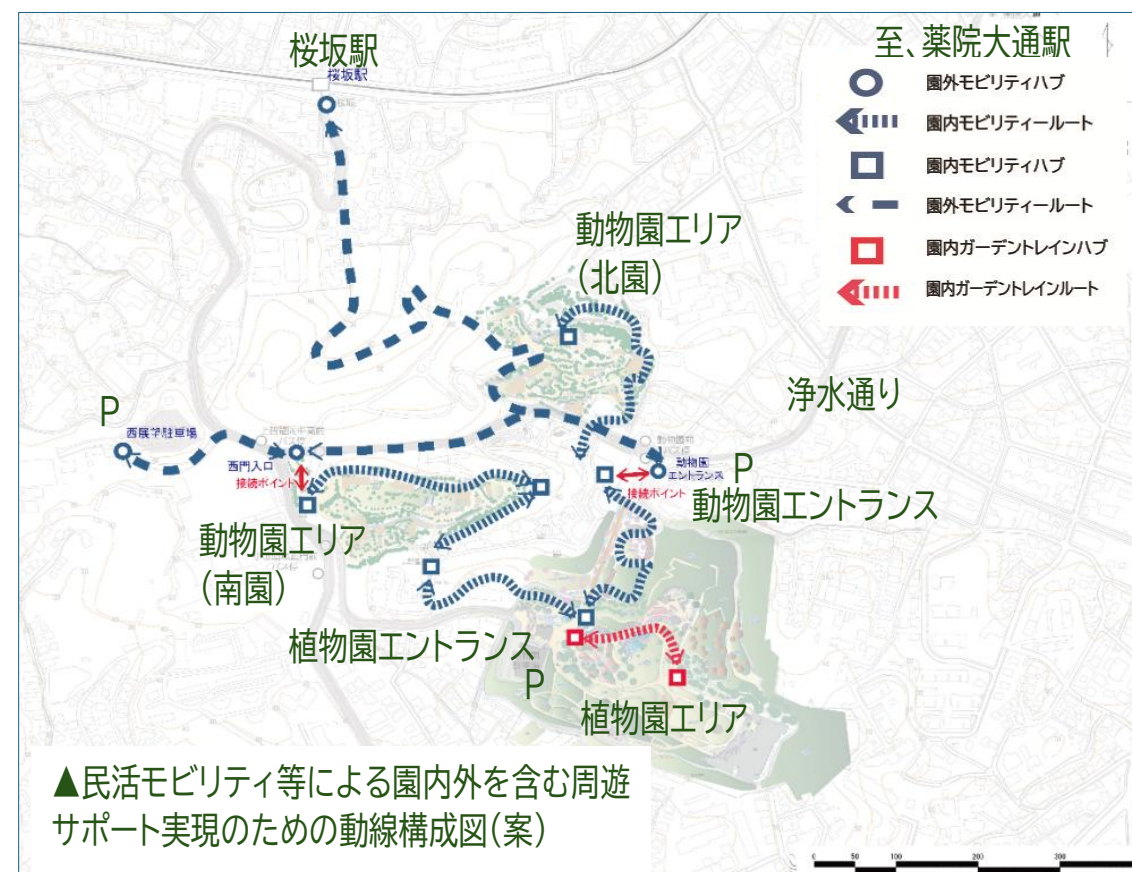
・官民連携によるモビリティの導入を図ります



▲既存のガーデントレインは引き続き運用



▲複数人利用を想定した園内巡回モビリティ等により、動植物園全体での回遊性を向上



⑦

来園者満足度の充実

1/2

★動植物園全体でのサービス機能等の適切な配置

●休憩施設等の再配置により、子どもから高齢者まで幅広い視点で、滞在時間中の満足度を高めます

- ✓軽飲食やトイレ等のサービス拠点、休憩ポイントを適切なバランスで配置します
- ✓動物園や植物園の展示機能と、観覧途中の休憩機能の多面的活用を図ります
- ✓暑熱対策、雨天時対策等、適材適所の機能検討を図ります



▲エリアのテーマ性に沿った休憩施設イメージ



▲没入感デザインとクールスポット機能を両立した休憩施設イメージ



▲休憩スペースの新設配置を含め、休憩・飲食等のサービスバランスに配慮します（※アフリカの森と草原エリアの配置案）

●これまでの遊戯機能のあり方からの転換を図ります（動植物園にふさわしい遊戯機能のあり方）

- ✓「子どもの五感を刺激し、動植物とのつながりが感じられ、生きる力を育む」をコンセプトとします
- ✓展示動物の生息環境や飼育環境と同じ環境のあそびを通じた実体験により、生態系の一部としての役割、あるいは生態系のまとまりが感じられる、仕掛けを配置します
- ✓園内の尾根や谷といった、動植物園ならではの高低差を活かした遊具機能を適切に配置します



▲海外の動物園における、岩・滑り台・枯木渡り等、子どもの遊戯施設の先進事例



▲背景の山々と馴染む地形の変化を加え、自然素材を活かした遊戯施設の国内事例



⑦

来園者満足度の充実

2/2

■ゾーニング図

